

愛知学院大学
第189回モーニングセミナー

聖徳太子研究の進展および
聖徳太子信仰をめぐる諸問題

名古屋市立大学特任教授
吉田一彦



愛知学院大学楠元学舎
2021年12月14日(火)

聖徳太子に関する史料——根本史料

①『日本書紀』(720年の成立)

- 聖徳太子に関わる最初の記述が見える史料。
- 聖徳太子に関わる根本史料。
- しかし、この書物は難解。歴史的事実をどの程度記述しているのか。
- その「史料批判」は近代歴史学の重要な研究テーマだった。
- また、仏教学、国語国文学、美術史学、建築史学などでも研究が進展。

②法隆寺系の史料

- 法隆寺金堂釈迦三尊像の光背の銘文、同薬師如来像の光背の銘文
- 三経義疏(三つの経典の注釈書)
- 天寿国曼荼羅繡帳の銘文(中宮寺所蔵)
- これらについての史料批判も近代人文学の大きな研究テーマ。

歴史学だけでなく、国語国文学、美術史、仏教学

③ 聖徳太子の伝記（複数の太子伝）

- 『延暦僧録』（788年）の「上宮皇太子菩薩伝」（唐僧の思託の選）
- 『上宮聖徳太子伝補闕記』（広隆寺系の聖徳太子伝）
- 『上宮厩戸豊聡耳皇太子伝』（逸文が現存、橘寺系の聖徳太子伝か）
- 『上宮聖徳法王帝説』（法隆寺系の聖徳太子伝）
- 『聖徳太子伝暦』（四天王寺系の聖徳太子伝）

最初は鑑真一行による。次に聖徳太子関係寺院による。記述に差異多し。

近代歴史学と聖徳太子研究

- 近代歴史学は、伝説のベールに覆われた聖徳太子のベールをはがし、その実像を求めてきた。しかし、玉ねぎの皮むきにも似て、ベールを一枚一枚はがしてもなかなか確実といえる実像にたどりつけない。
- 近代歴史学は、詳細な史料研究を行ない、それらには史実を伝える部分が少なく、ほとんどが特定の意向による後世の創作であることを明らかにした。
- 特に『日本書紀』の史料批判が進展し、聖徳太子関係記事に信憑性に乏しい記述が多々あることが明確になった。

津田左右吉1950、小倉豊文1972、大山誠一1998、1999、2003など。

山川出版社『詳説日本史B』の記述の変化

- 『日本史』教科書にも学問の進歩が取り入れられている。
 - ①これまで知られていなかった新しい事実が発見される。
 - ②これまでの理解が実は誤りだったことが発見される。
 - ①と②は並行して進む。
- 人名が「厩戸王」になる ← 小倉豊文説
- 「摂政」が消える ← 小倉豊文説
- 「皇太子」が消える ← 荒木敏夫説
- 『三経義疏』が消える ← 藤枝晃説
- 現在は「甥の厩戸王(聖徳太子)らが」という記述。

聖徳太子信仰研究の意義と重要性

- ・「聖徳太子」をめぐる史料批判ばかりでなく、後の時代、すなわち奈良・平安・鎌倉時代以降の聖徳太子信仰について多角的に考察。
- ・聖徳太子が仮に創作された人物であったとしても、そうした〈聖徳太子〉のことを、日本人たちは愛し、尊敬し、さらには信仰してきた。日本人は聖徳太子に何を求め、何を投影してきたのか。聖徳太子信仰の問題。日本文化史、宗教史、さらには日本文化論を考察するに重要な研究テーマとなる。

吉田一彦2011

聖徳太子信仰の展開

- 「聖徳太子信仰」とは何か。 ⇒ 聖徳太子を聖なる存在として、さらには仏・菩薩にも等しい存格として崇拜、信仰する行為。
- 奈良・平安時代から始まる。朝廷や貴族社会・寺院社会から開始。『日本書紀』、皇族、貴族、寺院社会、特に鑑真一行、四天王寺、法隆寺で進展。
- 鎌倉・南北朝・室町時代には、さらに発展して広く民衆世界に流通。
- 聖徳太子像(彫刻、絵画)、太子絵伝などの造形が発達。傑作も誕生。
- 日本仏教史、日本宗教史の大きな特色の一つ。

聖徳太子信仰によって日本で 成立・発展した思想・文化

① 絵解きの文化、絵伝の文化

中国に起源あり

日本はこれを受容。その後独自の発展。聖徳太子の絵解きからか。
多くの作品現存。

② 王法仏法相依説

「王法」と「仏法」が互いに補完しながら日本を治めていくとする思想。「王法」と「仏法」は車の両輪。

「王法仏法相依説」の初見は『四天王寺御手印縁起』[上島享2010]。

③ 天皇制度の社会・周縁への浸透

非農業民(山の民・川の民、運輸交通業者、職人)、被差別民などへ。

律宗、親鸞門流

鑑真とその弟子が日本にもたらしたものの

[中国仏法の日本への導入]

◎戒律を日本に伝えた。南山律。

戒律のみならず、種々の仏法の表現形式を日本に伝えた。

- 高僧の別伝：思託『大唐伝戒師僧名記』の「大和上鑑真伝」（日本の別伝の最初か）
 - 淡海三船『唐大和上東征伝』（宝亀十年〈779〉）
- 高僧伝：思託『延暦僧録』（日本の高僧伝の最初）、そこに「上宮皇太子菩薩伝」
- 高僧像：鑑真和上像（日本の肖像彫刻の最初）
- 聖徳太子慧思後身説：慧思は死後東に生まれかわったとする話と聖徳太子とが結合。

聖徳太子伝と四天王寺の壁

- 思託「上宮皇太子菩薩伝」
『日本書紀』以外の最初の太子伝。慧思の話からはじまる。「菩薩」という位置づけ。
- 『上宮聖徳太子伝補闕記』
先行書として「日本書紀、暦録、并四天王寺聖徳王伝」
- 『聖徳太子伝暦』
先行書として「日本書紀、在四天王寺壁聖徳太子伝、并無名氏撰伝補欠記」
- 四天王寺で聖徳太子伝が書かれ、壁にも書かれていた(絵画ありか)ことが知られる。←私案、鑑真一行の影響か。

絵解きの文化・絵伝の文化

- 中国の石窟寺院: 敦煌、麦積山、雲崗、龍門、大足、安岳など
龕の内部に仏像や壁画多し。壁画にストーリー性あり。場面ごとに話が進展。
- 敦煌の莫高窟
 仏伝図、本生図
 観経変、法華経変、弥勒経変、薬師経変、金光明経変、金剛経変、維摩経変、報恩変、仏頂尊勝陀羅尼経変、父母恩重経変などの変相図。
- 説話図(説話画、故事画)、説唱図
- 「変」に「変文」

四天王寺と法隆寺

- 聖徳太子信仰の宣揚の二つの中心地。――ただし、両寺はライバル関係。
- 聖徳太子の伝記記述をめぐって異なる見解を説き合う。
- 生没年、年齢などの基本情報にすら違いあり。
説話の細部(たとえば、一度に十人の話を聞き分けたのか、八人なのかなど)になると、あれもこれもが違っている。
- 広隆寺、橘寺も参入。
- 四天王寺は基本的には『日本書紀』に依拠し、それを発展させた伝記。法隆寺は『日本書紀』の記述とは大きく異なる伝記を説いた。

聖徳太子の年齢と生没年

	史料	守屋合戦時年齢	薨去時年齢	生没年
○	日本書紀	15、16歳の間	記述なし	572または573～621
①	聖徳太子伝暦	16歳	50歳	572～621
②	上宮聖徳法王帝説	14歳	49歳	574～622
③	上宮聖徳太子伝補闕記	14歳	49歳	574～622
④	上宮厩戸豊聡耳皇太子伝	15歳	49歳	573～621

『聖徳太子伝暦』の成立

- 四天王寺系の聖徳太子伝を集大成したもの。
- 榊原史子『『四天王寺縁起』の研究』（勉誠出版、2013年）
朱雀朝（923～952）頃に一巻本として成立し、それが992年（正暦三）に増補されて二巻本となり、さらに『御手印縁起』が出現すると、その記述を一部付加して、現行本の『伝暦』が成立したと結論。
- 『聖徳太子伝暦』の説が通説になる（平安時代から明治前期まで）。
法隆寺の伝記や美術を重視するようになるのは明治のフェノロサ、岡倉天心から。

『聖徳太子伝暦』(四天王寺系)の戦略

- 独特の伝記記述のスタイルをとる。歳毎に事跡を記述する。
- 聖徳太子の誕生から死去までを各年ごとに記述していく。
- 他寺の説を批判、否定するための挑発的、挑戦的な記述方法。
- 四天王寺の守屋合戦16歳説が先に言い出され、これに対抗して広隆寺あるいは法隆寺から14歳説が提起されたか。
- 伝暦が四天王寺系の伝および絵伝の根幹となった。

法隆寺の絵殿

- 東院に舍利殿及び絵殿(舍利殿が東側、絵殿が西側)
現在の建物は承久元年(1219)。重文。
- もとは延久元年(1069)成立。
- ここに「聖徳太子絵伝(障子絵)」あり。
秦致貞の作。国宝。東京国立博物館現蔵。
- 現在はパネル装
秦致貞は四天王寺系の絵師か。絵画は『聖徳太子伝暦』に基づく。

聖徳太子信仰と浄土教の結合

- 四天王寺には、聖霊院、絵堂があり、また西門があった。門の外には鳥居があった(のち忍性が石製に改築)。西門付近には「念仏所」。鳥羽上皇は「念仏三昧院」を建立。
- 西門で浄土教が発達。念仏聖たちが活動。証空、空阿弥陀仏
- 13世紀前期、西門付近に「談僧処」があった。
- 聖徳太子信仰と浄土教の結合は四天王寺にてなされた。

中世における聖徳太子信仰の展開

- 律宗、親鸞系諸門流(浄土真宗)により、社会の周縁部へ。
非農業民、被差別民に聖徳太子信仰が流布。
- 親鸞系諸門流(初期真宗)に強い聖徳太子信仰あり。
- 浄土教と聖徳太子信仰の結合。親鸞やその門流の僧は「念仏聖」。四天王寺系。あるいは六角堂系か。両方か。

聖徳太子像(絵画、彫刻)、絵伝など。現存事例数多し。

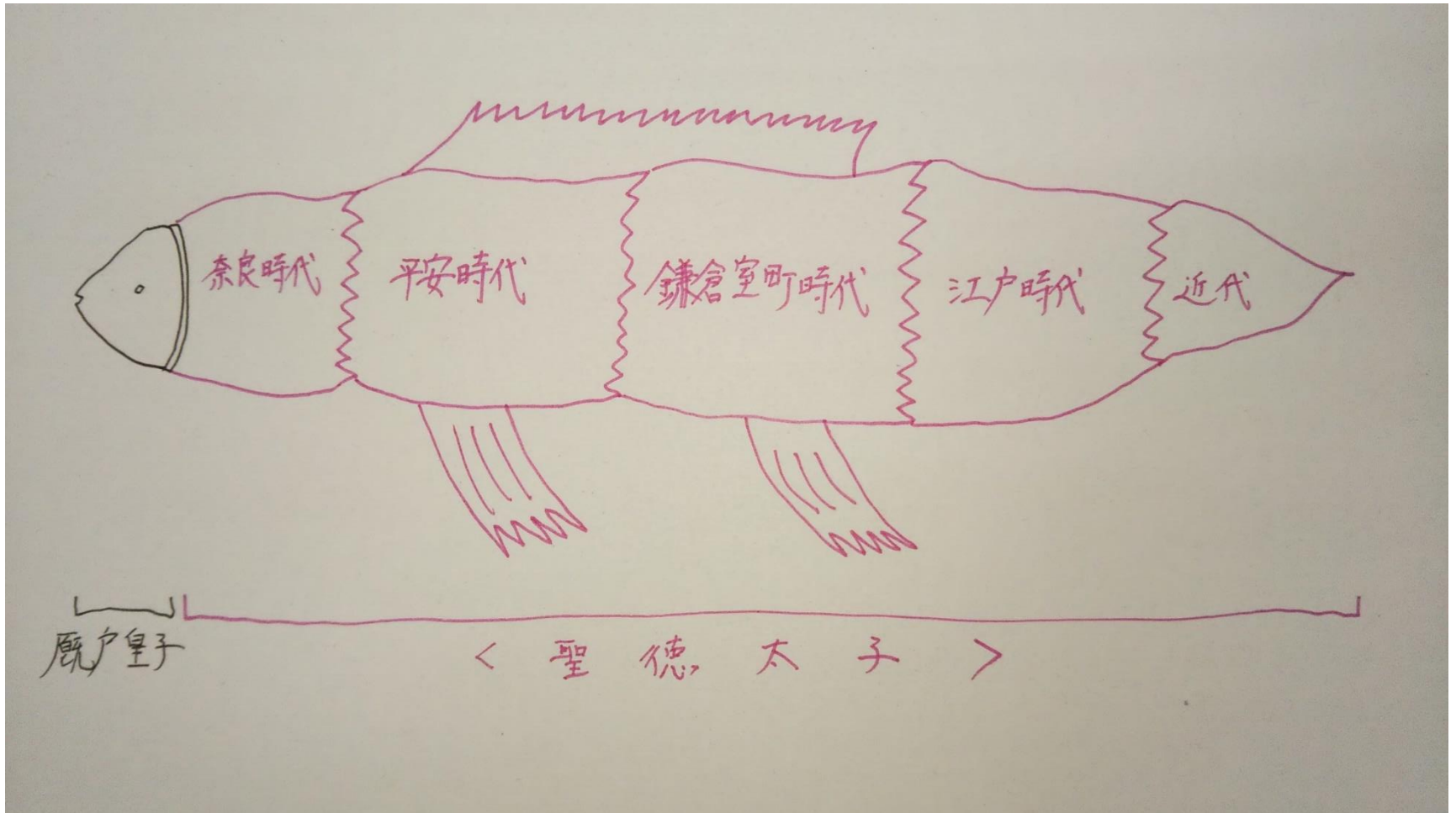
王法仏法相依像(真俗二諦像)〈右手、左手に笏・柄香炉を持つ〉は四天王寺系の造形。

和讃(『皇太子聖徳奉賛』)

天皇制度の社会への浸透とともに

- 親鸞系諸門流や律宗による活動。
- 聖徳太子信仰の大衆化。
- 中世のみならず、近世へ、近代初期へ。
- それは天皇制度の社会への流布、浸透に大きな役割を果たした。

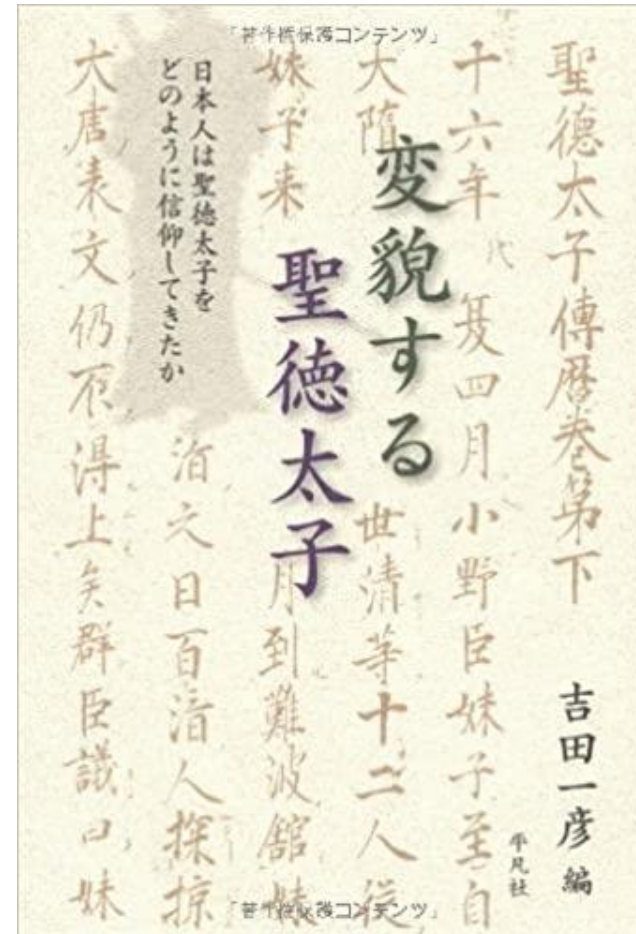
厩戸皇子と聖徳太子



集英社新書



平凡社



参考文献

- 伊東史朗編『調査報告 広隆寺上宮王院聖徳太子像』(京都大学学術出版会、1997年)
- 井上鋭男『一向一揆の研究』吉川弘文館、1968年
- 上島享『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、2010年
- 大谷大学博物館編『聖徳太子伝の世界』〈図録〉、2008年
- 大山誠一『長屋王家木簡と金石文』『〈聖徳太子〉の誕生』(吉川弘文館、1998、99年)、
- 同編『聖徳太子の真実』(平凡社、2003年)
- 小倉豊文『増訂 聖徳太子と聖徳太子信仰』(綜芸社、1972年)
- 小山正文『親鸞と真宗絵伝』正統、法蔵館、2000年、2013年
- 菊地勇次郎「天王寺の念仏」『源空とその門下』法蔵館、1985年
- 榊原史子『「四天王寺縁起」の研究』勉誠出版、2013年
- 真宗重宝聚英七(平松令三他編)『聖徳太子絵像・絵伝・木像』同朋舎出版、1989年
- 脊古真哉「浄土真宗における聖徳太子信仰の展開」(前掲『聖徳太子の真実』平凡社、2003)
- 同「聖徳太子絵伝の世界」(後掲『変貌する聖徳太子』)
- 津田左右吉『日本古典の研究』下、岩波書店、1950年
- 早島有毅「専修念仏運動における親鸞の太子信仰」(後掲『変貌する聖徳太子』)
- 藤井由紀子「救世観音」の成立」(大山誠一編『聖徳太子の真実』平凡社、2003年)
- 同「聖徳太子霊場の形成」(後掲『変貌する聖徳太子』)
- 吉田一彦「聖徳太子信仰の基調」(吉田一彦編『変貌する聖徳太子』平凡社、2011年)
- 同「天皇代理者への崇拜」(道元徹心編『日本仏教の展開とその造形』法蔵館、2020年)
- 同「聖徳太子研究の現在と親鸞における太子信仰」『教化研究』166、2020年